

# ミサゴ便利

平成 13 年 12 月 10 日発行

弓削野鳥の会編集発行

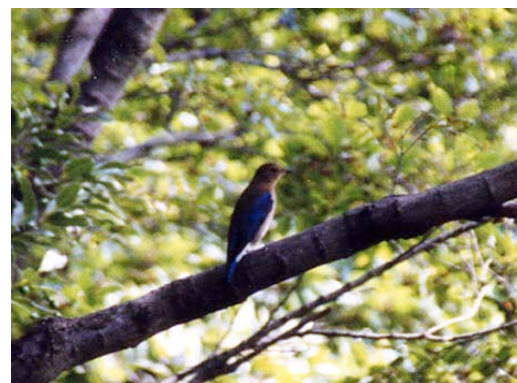


## しあわせの青い鳥みつけた

10月の初旬、久しぶりに三山でバードウォッチング。平山氏よりそろそろオオルリが来ているとの情報が

あり、期待して行ってみると、きらりと朝陽を浴びて瑠璃色に光るものを発見、双眼鏡で追いかけると、背中は瑠璃色で頭は茶色、持ってきた300ミリの一眼レフのカメラで撮影し、帰って図鑑でよく調べてみるとオオルリの幼鳥とのこと、早速現像プリントしてみる

とまあまあの出来であった。ウレシイ、初めて見たオオルリ、幼鳥ではあるが瑠璃色に光る翼、本当に綺麗だった。バードウォッチングの醍醐味はこういう時に一番感じるネ、幸



せの青い鳥とはオオルリのことかもしれませんね、何かいいことあるかもね。ただタイミングがよかっただけかな。(T.M)

昨年まで初夏になると、セッカという可愛くて珍しい小鳥が佐島の西辺地区と江尻地区で観察できた。環境が変わったせいか今年は姿を消した。どこへ移動したのだろうか？彼らの新天地は見つかったのだろうか？。また、冬の好天日、松原海岸ではカンムリカイツブリというこれまた珍しい鳥が岸近くで、水に潜っては餌を捕るのが



よく観察できた。今年はどうだろう。

浜都湾も近頃随分環境が変化している。環境が変わればまた、その環境に順応する生態系が構成される。そ

れはそれで新しい楽しみかもしれないが、悔しさや淋しさをも覚える。こんなことを繰り返しているうち「見慣れたスズメやホオジロ、メジロやヒヨドリがいなくなった。」というようなニュースにだけは接したくないものだ。野鳥は仕事や現金を与えてはくれないが、かけがえのないふるさと感をもたらせてくれる。ふるさとは、どこでどう思うにしろ、その人にとっては存在の源である。多くの人はこの想いを心のよりどころとして頑張れる。一頃に比べると山野を駆け回る子供達がめっきり減ったように見える。たぶんコトは少子化だけが原因ではないのだろう。野鳥を駆逐するスピードと、私たち

がふるさとを喪うスピードとは軌を一にしているように思えてならない。バードウォッチングに参加して、双眼鏡ひとつ中継ぎにする

だけで随分  
実を思い知っ  
ことを知った  
みを手に入れ



「知らない」という事  
た。だが知らなかった  
おかげで新しい楽し  
た。一方新しい苦悩を

抱え込むことにもなった。洋の東西を問わず人は珍しいモノには価値を見出す。一步進めて価値あるものの存在を保持するための環境をもその価値観のなかに加えてこそ、我々は「人間」と呼ばれるに値する、というのはちと暴論に過ぎるだろうか。知らぬが仏ということわざは本当はどういう意味なのだろうか？。

## コ サ ギ (海 の 狩 人)

先日新聞を読んでいると、コサギのことが載っていた、彼らは水辺を歩き回って小魚を探すのが中心ですが、最近手の込んだ漁の仕方



をしているコサギがいるとのこと、なんと、くちばしを水面にちょっとつけて波紋を作り、エサかと思い近づいて来た魚を捕まえる、ルアー釣りのようなことを

するコサギもいるとか。実に巧妙な手口を使うものですね。

## 空 飛 ぶ 宝 石 カ ワ セ ミ (翡翠) と 遭 遇

9月の初旬、佐島の竹ノ浦池で空飛ぶ宝石、カワセミの幼鳥を観察することができました。たまたまゴイサギの幼鳥を4羽観察していたところ、翡翠色に輝くカワセミが目の前を横切っていきました。

とっさに双眼鏡で追  
に遅く遠くへ飛で去  
はまた日をあらため  
ができると確信し、2  
本当に観察すること



いかけましたが、す  
っていきました。これ  
て来ると必ず見ること  
日後に行ってみると、  
ができました。池の奥

の方からキラリと光る小さな宝石が飛び出してきました。10メートルは優に離れているところからカメラで撮影、10センチ程度の大きさのカワセミをフィルムに納めることは何とかできたものの、出来上がりはサービス版で3ミリ程度の大きさ、拡大してなんとかそれらしくなりました。たぶん今年、池の土手に営巣し生まれた幼鳥のように思われます。このカワセミも各地で希少な特定種となっています。温かく見守ってやりたいものですネ。



## 鳥 の 名 の 語 源

アマツバメ (雨の降る前に現われる)、ライチョウ(雷の前に現われる)、ツバメ (土を食べる) オオミズナギドリ(海面を薙ぐ様に飛ぶから)、ハヤブサ (速く飛ぶので)、ノスリ (野を擦るように飛ぶ)、ウソ (口笛を吹くような鳴き声)、ムクドリ(棕の実を食べる)、コノハズク (枯れた木の葉の模様)、トラツグミ(虎の毛皮の模様)、アジサシ (鰻をくちばしで刺して食べる)



## また逢えるかな オオハム 松本 敏和

平成13年2月4日、引野付近を車で走っていると、息子が「黒いカモメがいる。」と言う、すべてはこの一言で始まった。とりあえず車を止め観察してみると、カンムリカイツブリのようにも見えるが、肉眼では識別できず、双眼鏡を取りに家に帰った。まだいてくれるかな、そんな気持ちで引き返す。まだいてくれたようだ、ドキドキ



しながら双眼鏡を覗くとカンムリカイツブリより大きく、首も太くカンムリカイツブリではないようだ。たぶんアビだ。「弓削の野鳥」には掲載されておらず、ひょっとしたら弓削で初の確認例となるのではないかと思い、写真撮影を試みようとして再び家路を急ぐ。カメラ片手にスコープ、三脚も用意して三度浜辺へ降りるが姿が見えない。引野海岸付近を再び探し回ったがどこにもいない。逃がしたかと思いつつ引き返すところへ私を呼ぶ子供達の叫び声がした。探していた反対方向の上弓削側にいたのだ、スコープ、三脚を浜に置き去りにし、カメラ片手に走り出す。やっとの思いで追いつき小走りしながら、シャッターを数度切る。300mm 望遠レンズに小走りしながらシャッターを押す。ブレない訳がないし、泳ぐスピードもかなり

速く駆け足程度では離されてしまうので、先回りして、上弓削側の波止の先で脛まで海につかりじっと待つことにする。カメラを構えて「こっちに來い、こっちに來いよしよし、もう少し近づけ。」と思っていた矢先に潜った。数分後、遙か沖合いで一度振り向き何事も



なかったように悠然と泳ぎ去った。追っかければ逃げるし、待てば来ないし、当然こちらの都合に合わせてカメラに向かってポーズを取って

くれる筈もない。野鳥の写真撮影が如何に難しいかを身をもって一羽の鳥に教えられる。11時から13時頃までの2時間が、一羽の鳥に夢中になっている私には一瞬の出来事のように思えた。あんなに追っかけ回したからいなくなるだろうと後悔したが、一週間後の早朝その姿を見かけホット一安心。写真が出来上がり図鑑と見比べ脇腹の後方に白い部分があることで初めて「オオハム」と識別することができた。もう追っかけたりしないから、来冬もまた逢えるかな。

**\* 観察記録等の投稿のお願い**

（自然観察に関する原稿、たとえば、植物に関する原稿、海の生き物に関するもの等何でもかまいませんのでお寄せください）

連絡先：弓削野鳥の会事務局（村上尚） 77-3607まで